

「科学」。不安定な情念の世界を彷徨い歩く私たちヒト族にとって、神に何もかも預けてしまうことに何か後めたさを感じる私たちにあって、それは何んと頼母しいことば（概念）であったことだろう。「科学」から生み出される様々な業績は、神の軀を脱し、自然界に華々しく挑戦していく人間に、「祝福されしもの」としての誇りと自信を与えてきた。そして又、この「科学」は宗教的迷信による奴隷の状態からの解放の旗手としてその榮譽を永らく称えられて来た。

しかし、私にはこの「科学」が非常に苦痛に感じられて来たのだ。私が、自らを意識し、自らの「生」のために、あらゆる権力への叛逆を志向していった時、それまでの私の内にくすぶっていた、「科学」への不信が徐々に大きな存在となってきたのである。私は「科学」の中に「支配の呪縛」、すなわち、その普遍性、合理性を楯に、あたかも「神」のごとく絶対的存在として君臨する支配者の側面を見出したのである。

「科学」は、東洋的土壌の上ではなく、西洋的土壌、すなわち伝統的キリスト教的、ギリシヤ的精神風土の中

で育まれてきたものであることは言うまでもない。

中世末期から西洋人はそれまで彼らのすべてを支配していたローマ・カトリック的宇宙観から自らを解放するものとして、人間の不安で気まぐれな主観を廃し、観測データなどの知識と人間の理性、知性に、その打開の道を求めた。つまり、これが「現代科学」を支える主知主義であり、合理主義である。ある面ではギリシヤ的精神の地位回復といえることができるかもしれない。しかし、このことは、単に紀元前にペロポネソス半島を、地中海を凌駕したあの時代的意味のものではなかった。というのは、このギリシヤ的精神を受け入れたときの西洋がもうすでにキリスト教的倫理観に蝕ばれていたし、又あらゆる人間と彼らの精神文化といったものもものを支える経済的側面に於いては、近代資本主義の芽が封建制度のもろもろのものを破壊しはじめていたからである。それゆえ、このギリシヤ的精神は、単なる古代のものとしてでなく、近代資本主義時代に合致した様装をこらして登場してきたのである。つまり「科学」というものの中で体现されていたのである。ここである「科学」と

は一定の目的、方法のもとに種々の知識を体系化したものという意味である。

又、キリスト教的倫理観というものはその人間と自然のとらえ方に端的にあらわされている。つまり、この自然界の中で、人間は神の恩寵を一身に集め、選ばれた生物としての存在であり、すべてのものは人間のためにつくられたものであるという見方である。そして更に、人間は神の軀を脱しようとして、自らを神の地位にのぼらせたのである。「カラマーゾフの兄弟」のイヴァンとスナルジャコフのごとく「もし神がいなければ、人間には全てが許される、どんなことをしてもかまわない」と。

「科学」は人間の主観が介入することをあたかも神的なものが入り込むかのように嫌い、厳正中立主義、客観主義をとりつづけた。唯、真理の探究のみが目的であるかのように。そして人間は、観測、実験といった方法で知識を次々と収集していった。そしてデーターの統計的確率の世界の中から仮説と公理をみつけ出し、資本主義的価値観の中でその緻密でかつ神秘的(?)な体系を作り出してきた。科学はその根源を問い続ける存在論的欲求を、それは神的要素を介入させるものであるとにぎりつぶし、現象面のみを体系化していった。

そして今や、その膨大さゆえ、「科学」は私達凡人の

手の届かぬところのものとなってしまった。

かつて、シモーヌ・ベューはその著作の中で、

「……現在の科学について通俗化できるのは、その結果だけであり、教育するつもりは相手に、知らしめないで信じさせる事になる。科学の魂そのものを成すところの方法にいたっては、その本質上、素人には不可解なものであり、また、科学者自身にさえも不可解なのである。

科学者がますます専門化するために、彼等個々のきわめて限られた領域以外では、かれらも素人なのだから。……科学的探求において、思惟は今日では、科学の既成の成果に従属せざるを得ないのである。そして、あらゆるものを明瞭に理解せしめ、あらゆる神秘を一掃すべきはずの科学が、それ自体、すぐれて神秘となってしまうた。」

といっているようなことになってしまっているのである。知的能力の差によって、私たち人間に共有化できなくなった「科学」は、実在の多くの人間を知的精神的奴隷の状態に落とし、抽象化された人間一般を神の地位に据えたのである。そして、知的エリートを祭司の地位に登用したのである。そしてすべての人間を、壱十壱式という普遍的法則、あるいは必然性への拝跪を強要してきただのである。

だが、真理とは何か、真理の体系とは何か、私にとっ

て、それは何を意味するのだろうか。『真理』とは、私の『生』よりも尊ひのであろうか。昔、ガリレオは、宗教裁判にかけられた時、『地球がまわる』という真理と自らの『生』のどちらをとったのであろうか。彼にとってそれは単なる知識にすぎなかったのである。そうなのだ、真理とは私に、私が生きようとする時に、私に広い視野を与えてくれる知識にしか過ぎないのである。

科学は又、主知主義と合理主義のみを基調とする。ここに又、ひとつ落とし穴が潜んでいるのではないかと思う。確かにこれは、一面誤りの少ない判断を下す為に必要なことかもしれない。しかし、私達は全てを知ってはいないし、全てを知ることもしないだろう。その限られたデータの中から、ある体系を作り出し、一つの概念を規定していくという作業の中に大きな危険性が孕まれているのではないだろうか。私達は往々にして、このことを忘れ、体系的にでき上がったものから全てを判断するというパターンを取るからである。

『科学』によって、いかにすばらしい社会が体系づけられようとも、又、いかに作られようとも、私がその社会の中で窒息してしまいそう不自由さを感じ、あるいは又、その社会が私の生理的リズムに合わないとするならば、私はどうして、真理であるが故に幸せであるなど

いうことができようか。真理への拝跪を強制され必然性なるものへの隷従を強いられているとき何故、私は幸福であるなどと言うことができようか。私は、私に隷従を強いる限り、これに叛逆するであろう。

サロン・リベルテール

毎週火曜日六時三〇分から

中央線水道橋駅東南口 喫茶「終着駅」で

(ウニタへ行く道 右側二番目の横丁を入る)

アナキストのサロン。討論会、おしゃべり、読書会、宛名書き……内容は特に決りません。その時集まった人たちの組み合わせやふんいきによって決定されます。コーヒを飲むためにきていいし、みんなが討論のテーマなどを持ってくればなお面白いと思います。

リベルテールの編集会議もそのときにやっていますので、興味のある人や、参加してみたい人は、来てくださいます。アナキストなら誰でも歓迎です。

全国的連合は可能か

西塔 昌 弘

全国的なアナキストの連合の要請が、各地から起きている。その背景としては、アナキズム運動の低迷をあげられるだろう。すなわち、その要請には、アナキズムの低迷及び各アナキストの散在性という現状↓アナキストの全国的連合↓アナキズムの発展、という意識が流れていると思われる。しかし、全国的連合がすぐアナキズムの発展に結びつかない以上、そのような連合の質を明確にすることがまず必要だろう。

アナキズムとはブルードンが定式化したアナキーを目ざす運動である。——各人による各人の統治——自立性。しかし、アナキズムがアナキーを実現する前段階にあるとき、それは当然各アナキストの自立性に拠るのだけれど、それはまた、権力に対抗するだけの集中力をも持たなければならぬ。

基本的に、アナキズムが持つ集中力は、その時点におけるアナキスト間の一致点の質、及び、アナキストの量によって決定される。各アナキストの一致点が、その主体的思想性にかかわればかわるほど、アナキズムは集

中力を獲得し、アナキストの量が多いほど、その集中力は倍化される。

現実を見るならば、各アナキストの分散性は保障されているが、主体的思想性の一致はほとんど無いし、主体的思想性ということ自体が、無視されている。それ故、現在のアナキズムは集中力を持つどころか、逆に、軽薄さと無責任さと、野合性をしか持てないのだ。

そのことから、われわれが今なすべきことは、1 自己の主体的思想性の形成及び確認、2 主体的思想性の相互確認、3 主体的思想性の相互変革、である。

このことは、アナキズムの集中力が量によっても規定される以上、全国的規模でなされなければならないし、全国的連合の質は、その媒体となるものでなければならぬ。

主体的思想性とは、けっして固定化されたものではない。固定化を拒絶するということは、それ自体アナキズムの思想だからだ。それに、われわれは、あまりにも非アナキズム的な、反アナキズム的な部分を自身の内に持っている以上、主体的思想性に対しても、自己否定が不可欠だからだ。そして、この流動性の中で、はじめてわれわれは主体的思想性を、相互変革によって一致させていくこともできる。しかし、そこには一つの矛盾がある。

何故なら、主体的思想性はあくまでも自己を主張しようとするもの、すなわち、自己肯定的なものだからだ。主体的思想性は、自己及び一致する限りの主体的思想性を肯定しようとし、他の一切を否定しようとする。この矛盾の中で、主体的思想性は、自己と一致しないものに対して、否定はするけれど受け入れるものと、まったく拒絶するものとに、その対応が分化していく。

主体的思想性の分析から、三つの運動の場があることがわかる。1 自己否定性を軸とする運動の場。2 主体的思想性の自己肯定性を軸とする運動の場。3 主体的思想性の妥協性を軸とする運動の場。

この中で、2の運動の質がアナキズムの集中力を決定するのだが、現在のには、主体的思想性の一致はせいぜいグループ段階でのみ可能だろう。それ故、1及び3の運動を全国的に展開することによって、全国的規模での主体的思想性の一致を勝ち取っていかねばならない。1及び3の運動の場を意識的に形成していこうとするとき、はじめて、全国的連合の形成が問題となってくる。そして、それは両方の運動の場に、それぞれ全国的連合を形成していかなければならないだろう。

主体的思想性の妥協において、四つの形態が得られる。
a 互いに相手の主体的思想性を受け入れることができ、

しかもそれが一致する。b 互いに相手の主体的思想性を受け入れるが、一致はしない。c 一方は、相手の主体的思想性を受け入れることができるが、他方はできない。

d 互いに相手の主体的思想性を受け入れられない。

a はbの特長なものとみなすこともできる。そして、3の全国的連合の質は、このaとbを合わせたものでなければならぬだろう。それ故、われわれは、互いに相手の主体的思想性を確認すると同時に、その主体的思想性を受け入れるかどうか相互に確認し合う必要がある。1の全国的連合の質は、それ自体からは導びかれない。何故なら、それが自己否定性を軸としているからだ。しかし、その三つの運動の場における役割を考えると、その連合の質は、3の連合の質に見合うものでなければならぬ。何故なら、あくまでも、それは3と有機的に結合しつつ、全国的な思想性の一致を形成していかなければならぬからだ。それ故、1の場合の全国的連合の質は、相互に相手の主体的思想性を受け入れる、という結合から、そう多くはみでないものとして、形成されなければならぬだろう。しかし、それはあくまでも全国的連合という組織段階においてであって、運動段階においては、共闘という形で、その枠をはみでることは出来ない。

違いの判らぬ男

——国家神道と原始神道について——

菅 輝 生

僕は黛敏郎というヤツが好きだ。というのは、彼は今日の日本人が進歩の美名の下にインペイしているタブーについて、かなりズバズバものをいうからだ。

彼がズバズバものをいうとき、彼はツバを飛ばさない。その静かな語りかけるような、それでいて自己を嘔みしめるような、紳士風の口調、いんぎんな物腰は、現代社会にたいする痛烈な皮肉でもあるかのような様相を現出させている。しかも、彼の吐くことばは、言挙げを嫌う日本人の心情を最も深く知っていたことだから、やむにやまれぬ大和魂が彼をしていわずしめていくことになり、彼のことは言霊となって若い女性信者の心のなかに侵入する。そして、彼女たちはここに彼の男らしさを感じる。

それはともかくとして、彼は、コーヒー会社のテレビ・コマーシャルがいみじくも語っているが如く、かなり違いの判る男ではある。というよりも、神道の本質ということについて、かなりくわしい男であるといえよう。

彼が土曜日の夜、再三再四言挙げしている彼の理論に

よれば、日本の神道とは、△キリスト教やユダヤ教のような人間と対立するゴッドのようなものを対象とした宗教ではなく△、△自然と人間との融和をはかろうとした古代の日本人の生みだした哲学△ということになる。

ここで、僕は彼の到達したこの理論を認めることにやぶさかでないことを言っている。しかし、彼はこの理論から強引に国家神道の正当化を開始する。つまり、彼はここから原始神道と国家神道の違いが判らぬ男に自己を転落させてしまっている。

僕の記憶が正しければ、△神社づいた△彼の言動がいっそう神社づき始めたのは、彼のプログラムのスポンサーたる出光興産の出光佐三店主が崇拜している宗像神社が祭られている沖ノ島を訪問してからである。僕はここで、話を進めるために、宗像神社と沖ノ島について簡単にふれたいとおもう。

沖ノ島は周知のごとく、朝鮮半島をめざす航路としての玄海灘に浮ぶ小島である。その島は古代の船びとにとって渡中（わたなか）の神として重要な位置をもっていたにちがいない。ここに祭られている神々は、イチキシマヒメ、タギツヒメ、タギリビメの三女神であって、『古事記』においては、彼女らはアマテラスとササノヲの「誓約△」の結果、天の安の河でササノヲの姫貴子として

生れている。この島には今もって古代祭祀の跡が神話さながらの状態に残っており、益田勝美氏（『文学』一九七一、四、五、六月号）によれば、『神話づくりの実態』を如実に示す『秘儀の島』であった。

さて、黛氏はこの島を訪づれ、彼の明晰なる頭脳は日本の神々が自然そのものであったことを悟る。そして彼は、破壊されていない自然環境を前にして、大自然の沈黙や、波音や草木の言語ひしひしと常陸国風土記に状況に日本的なミューズの神を見、西洋音楽を、否、音楽そのものを総否定するかのような言動を吐く。僕は彼が音と話して何年になるか知らぬが、音楽家・黛敏郎がこんど作曲を断念するかもしれぬ、と心ひそかに期待したが、それはともかくとして、彼の沖ノ島での発言は僕の期待を裏切るものではなかった。

ところが、彼はスポンサーへの配慮のためか、宗像神社の重要さを強調する結語の中で、『宗像の三女神は大自然の神格化であり、それゆえに尊い』ことを強調しながらも、あきれたことに『三女神は歴代の皇室を守護しようとしたところに、その偉大さがある』などと全面的にズッコケてしまっているのである。

それゆえに、彼は先日、横井某なる生きていた英霊を記念する特集のなかで、靖国神社の国家管理の必要性

を説いてしまっているのである。しかも、彼のことは説得力がある。たしかに、まだ還らぬ一〇〇万の英霊たち——侵略戦争の犠牲者である戦士としての民衆たち——を祭ることに意義がある。黛氏を述べているように、日本の神道には、祖霊（ホトキあるいはホトケとしての）を神として祭る風習がある。二〇〇万人以上にものぼる彼らは、二十一世紀以降の人びとにとっては、祖霊ではある。しかし、それは国家あるいは国家神道が祭るべきものではないのである。

黛敏郎は原始神道と国家神道と同一視している。彼の誤解は、神道を日本人の自然哲学観としていることに発出する。そして、彼は国家神道をヨゴするとき、神道は宗教でないことを主張する。ここに、彼のブラドックスが生ずる。

それこそ、僕の理論によれば、神道は欧米の宗教とは異なるけれど、ほんらいは宗教そのものでしかないのだ。神と国家では、すくなくとも神の方がさきであるはずだ。にもかかわらず、彼によれば、神よりも国家の方が先になってしまうのだ。しかも、彼の論理的帰結によれば、神は国家のための神となるほかないのである。

彼は昭和二十年以前の明治国家体制が、民衆が時間・空間を隔てて保守してきた古代神道（あるいは古代神道

的民間信仰）を弾圧してきた事実を知らない（僕は今日の成田のもんだいもこの観点から捉えかえさなければならぬとおもっている。日蓮ではないが、こういう日本をアマテラスはもはや守護されようとはしないはずである）。

僕の理論では、国家神道を撃つ契機は民間信仰の中にこそある。だからこそ、明治国家は国家神道を国是とする過程でそれらを弾圧してきたのだ。僕が青ヶ島でイシバサマやカナヤマサマなどの民間信仰の素朴な神々に礼をし、祭神のわからぬ無格社のまえて柏手を打つのは、国家神道を打つ武器がこれらの原始的な神道の中にあると考えているからである。

これはかなり危険な論理であるかも知れぬ。しかし、僕はアナキストとして、けっして国家神道のなかには落下はしない。

話をもとに戻そう。黛敏郎は原始神道と国家神道の違いを知らぬ男でしかなかった。否、ほんとうはその違いを知っていたのだ。だから、彼は意識的に国家神道を原始神道のことばで語り、原始神道を国家イデオロギーの中に融解させてしまっているのである。

僕らは、原始神道と国家神道の違いを理解し、彼らに敵対しなければならない。（一九七二・二・二〇）

野 火

連合赤軍事件

南軽井沢の大捕物からリンチ事件まで、マスコミは大見出しで紙面をかざり、おかげで立川基地の移駐も沖繩のことも影がうすいようだ。政府には有利だろう。

運動で何よりも大切なのはお互同志が信じ合い、信頼し合うことだ。これは常識なのだが、権力体制を持つ革命団体では統制が重視され、奴隸的服従が要求される。ことに弾圧が激しいときには尚更である。青年たちはこうした中で黙々と成行にまかせて運動を続けていたように見えるが、はたして革命的情熱に燃え続けていたのだろうか。昨日までの同志を今日は査問し、リンチする。査問され、リンチされた者たちは絶望と憤怒の中で死んでゆく。これが革命に挺身した結果なのだ。これを越えて明日の光輝が考えられるだろうか。革命的行動とは、こんなに同志を審判し、生命を奪うことを含むのだろうか。当局のスパイ政策で同志が敵に見えるようになったときは運動自体の破壊のときである。こうしたことは戦前の共産党でも行なわれていた。十九世紀のロシアのニヒリストたちの活動の物語りや、レーニンの国家と革命やわれら何をなすべきかなどの教条が、一種のファナチ

シズムを生み出しているように見える。社会主義に目ざめようとする若い魂が、フラフラと引きつけられて入り、捕えられて抜けられなくなるのは、こうした物語りや教条が確信をもって、力強く語られ、それに革命の規律は酷しいのだといった権力機構の御托宣が加わるためである。たよりない人生を生きる人々はこうしたドグマや御托宣に、一も二もなく参ってしまふ。

こうしたリンチの執行は、民主主義的形式の多数決による査問会の決議の結果かと僕は想像したが、そうでもないようだ。中央委員会の断で、その中に一女性の発言が大きき力をもっていたらしい。これは各委員に自信がなかったことを示すものでもあらう。いかに理路整然としていても、口頭の理論が常に正しくはない。そこでは語気や態度の強さや座の空気が、他の冷静さを奪うということがある。その執行の時は、勇敢そうに残酷を敢行せねば今度は自分が疑われはしないかと言った奴隷の卑怯な気持もはたらく。こうした者たちにつくられる革命後の社会はどんなものだろうか。

革命的行動において要求されるものは決して口頭の理論ではなく、万人の正義にもとづく主義とそれに沿うた行動で、その行動に関しては一人一人の決断が要求される。これがなくては権力者への盲従が生ずる。いくらか

民主主義気取りで査問会などをしたところで、中に一人でも刑事のように疑い深い者がいたら、こうした人間の発言が有力で懲罰とか除名が決議されるのが普通で、心では賛成しないのだが大勢に順応するといった多数決が出来上る。歪んだ者の偏見に引ずられたる多数決だ。

マルクスの著書でも、レーニンの国家と革命その他でも、またアナリスの諸先輩の著述にしても、「批判さるべきものとして、そこにあるので、信仰の対象である。批判は人類の千古を通じての生存へ真実を基礎とすべきで、単なる英雄的行動の軌範を求むべきではない。行動にはその時の状況によく偶然的な一時的な要素も多く含まれている。弁証法にしても、この真実を求めるための方法であって、唯物弁証法だけが正しい方法ではない。それは唯物的立場での経済史観に應用された方法で、実証的に帰納された結論との一致あるいは不一致は、さらに課題として残される。

武力蜂起を目ざした運動は戦前のアナリストの中にもあった。これはレーニン主義などを加味したものだった。「前衛」といったエリート集団が青年たちを引きつけるのは、そのヒロイズムである。こうした十九世紀の思想は特にマルクス主義によって唱導されたが、明治維新前後の日本では、封建時代の後を受けて人斬りが横行

した。この連中は志士と称するエリートで、前衛意識が強烈だった。武力を使用することは殺人を予定するもので、これ以上権力的なことはない。人は武器を持ったなら人格が変わる。武器がその人格の延長となるからだ。

明治維新当時、「存在・神」に直結した信仰に生きて殉教を覚悟して堂々と権力者の前に立ったのは、長崎の浦上の庶民だった。この頃の日本には人類愛とか人道主義といった言葉はなく、そうした考え方からの外国からの抗議も「上からの命令」という言葉で突張って迫害を強行した。この上からの命令という言葉は日本官僚主義や愛国心をつらぬくヒエラルキーの倫理で、自衛隊も機動隊もこれによって養成されている。

三百年位前にも庶民は一向一揆を起したり、切支丹として殉教している。浦上の切支丹は幕府の弾圧を潜って信仰を守り通した人々だった。この大戦中シナで勤めていた頃、陸軍に圧迫されて解散した張宗遠部隊の者たちが、僕等の所に就職したことがあった。予さんが僕の所に来て「三浦さん、気をつけなさい。あれは人を殺したことのあつた人々ですよ、眼をこらんなさい」という。僕には眼の光で区別はつかないのだが、シナの庶民はこうして警戒し、寄り添って生きている。庶民を動かさないような主義や思想は、結局エリートや前衛共の思いの上

たうぬぼれでしかない。アナリズムはこの庶民の中に

生さる思想なのだ。フランス革命やロシア革命のなかにわれわれはこの庶民の願と、それをこまかして横領する権力主義者インテリ革命家を見ねばならない。僕が一個の自覚を言うのは、この永遠の庶民の中の個であって、インテリやエリートの個ではない。こう言うからといって庶民を美化するのではない。連合赤軍で強い発言力を持った女の中にも、長い日本の封建的圧迫でイビツにされた庶民のヒステリックな逸脱を見る。女に限らず男にも、こうしたイビツなものが多くあり、われわれの運動はいつでもこうした者たちに裏切られるということも考えない訳には行かない。庶民は汚辱の姿も持っている。

知的に先端を行くはずの、行けるはずの学生たちが、革命は下から、個の自覚に根ざして、上部構造を破壊するにいたる、人間の生命の運動であることを考えないで十九世紀的な権力革命を狂信するのが不思議でもある。

X

(三浦)

CIRA (国際アナキズム研究センター)

一九七二年三月二十六日(日)年次総会を開くといつて来た(スイスのローザンヌにおいて)。その議題の一九七一年の活動報告の概要は次の通りである。

一九七一年中の受領分担金一三七〇、内新規会員七八〇、書籍貸出数四八〇以上（一九七〇年四六〇）、来館者五〇五名、内一夜ないし数週間滞在者五五名、発信三九六通（二二ヶ国）、新本またはパンフレット受理数三六〇、報告第二二号、第二三号各八〇〇部、バクーニンのパンフレット「パリ・コミューンと国家思想」をフランス・アナルシスト連盟歴史部会の協力によって発行。

×

アナルシー・秩序の新聞、アナルシスト労働者同盟（A O A）機関紙、創立者ベリガリーク、創刊一八五〇年、以前はバクーニンによって開催されたサンテチエヌの国際大会を継承するものとなっていた。

ベルガリークはブルードンと同時代のアナルシストで若い日のエリゼ・ルクリュにも大きく影響した。

この前のA O Aの大会には平山房子君も参加して、その報告はリベルテールにも転載したことがある。そして一九七三年の夏にまた大会を開こうとしている。

前に僕が日本アナキスト連盟の国際部をやっていた頃、フランスにはアナキスト連盟（F A）の外にこのA O Aがあり、どれと連絡をとろうかと、その機関紙を読んだ。A O Aの方はF Aをフリーメーソンなどと盛んに毒づいていた。「同じアナルシストでありながら」と

F Aに連絡をとることにした。今もそれを続けている。A O Aのポラトン君は「自由連合はもういない」と言って来たことがあったが、その後も送り、今もリベルテールとアナルシーの交換は続いている。F Aは若いインテリが多いらしく見え、堂々と月刊ル・モンド・リベルテールを出している。アナルシーの方はタイプ印刷の粗末なものである。しかし日本で言えばアナキスト・クラブといった純情さと素朴さがあふれている。最近来た12月号のページを訳してみよう。

協調（相互理解の意味）のために

さる七月三十日、A O AはシャートルーのU F Aグループから一通の手紙を受取った。その趣旨は「……結集。意欲が明らかにあって、最近シャートルーU F Aはアピールを出した。ア・メリク（ツールーズO N T）と同じ方向で努力している……もちろん、誰かれ構わずに結集しようというのではない。最小数の基礎の上に結集する必要がある。構造的な組織をつくることではない……この結集においては、マルクス主義者、自称リベルテールおよびフリー・メーソンを排除するといった方法においてである。われわれは諸君が何故傍観しているのか理解に苦しむ……アナルシストはまじめな人々であり、単純にしかも真剣に組織されねばならない」。

その回答

このはつきりしたシャートルーのグループの手紙による抗議とはかわりなく、われわれの立場は「A O Aの同志は一人も組織的形式で寄せ集められることを承知する者はいない」ということを、はつきりさせたい。すべてのアナルシスト集団の協調を目指すことをはつきりさせて回答した。そしてわれわれはシャートルーのグループに、この方向に進んで行くすべての提案を検討することには賛成だと言った。これを書いている今の時点では、われわれは検討すべき提案は一つも受取っていない。

これについて、どう考えるべきか。

われわれはあらためてアナルシストの宣伝と活動の総体を目指していることを再確認する。世界のアナルシストの緊密な協調のために。マルクス主義は人間を腐敗させる。資本主義は貪欲にする。議会主義は偽善する。愛国主義は人間を新しい屠殺場に導く。

救いはアナリズムにある。だが、われわれは組織とか構造という古臭い概念と、きっぱり手を切った奔放な闘争的協調をしなければならない。アナルシーはこのようにして全体の開花の可能性をもたらす個人の自由な連合でなければならない。アナルシスト家族の永続的協調

の主導的保障的概念は、この自由で忠実な承認の中にある。A O Aはこの解決のために緊急に乗り出す必要があると考える。A O Aの闘士たちは、必要に応じて、こうした主導的諸理想が内包している責任を受け入れることによって、それらの理想を主張することを誓うものである。その創立（一九五六）以来、A O Aはアナリズムのすべての諸潮流を友情的協調のなかに結集させようとした。それぞれの存在理由は人々の頭脳と態度の自然的多様性に応じるものである。A O Aが理解する自由協調（自由な相互理解）の役割は、1、アナキストたちの間に道徳的、知的、物理的コミュニケーションを確立する。2、社会環境の中にアナルシストに共通の理想を広めてゆくことである。この目的は、それぞれの間の連絡が十分にそして継続的な方法で実行されるとき、組織する者たちの間の意図と事実の完全な一致を示すときに、到達されるものであることが理解されるだろう。行動の方法は努力の凝集力と自由協調（自由な相互理解）の調整の方法の性質に結びつけられている。実際的に、それらはわれわれがたえ忍んでいる現在社会の枠組の中で、財政的必要に刻印されている。言論出版の発展がしばられているのはこの必要である。アナルシストの哲学の根底にある諸原則が、一度すべての者のためにアナルシストの

精神と宣伝の文書にしたがって、定められた教育と闘争の任務に一致しなければならないということを要請する。要するに、アナルシストの大きな新聞が全体として自由協調（自由な相互理解）、はっきりした良心、そして遂行すべき使命を証明するような仕方、調和的機能をはたすにいたる生命力をもつということになる。

この自由協調による信頼を取戻すことによって、一時いやがられたミリタンチズム（闘士精神）がふたたび活発で良心的なものになり、アナルシスト思想はふたたびその独自な一つの場を持つものとなるであろう。A O A

X

望月百合子さんから

リベルテールをいつもありがとうございます。火曜日のコーヒーをのお集りに出席したいと思いつながら、まだ果せずにおります。宮下太吉の墓碑を立てることがいよいよ甲府の人達で実現しかかっております。去年、木の墓碑は立てたのですが、後の世の人々の評価はどうであれ、ともかく新しい社会をと念願し、日本では歴史はじまって始めての企てを試みた太吉の標だけは残しておいた方がよいと思うからです。墓というより歴史の一つの小さな点としての意味はありましよう。それから黎明期の捨石的存在に甘んじ、多くの仲間をたすけて育てて来

た渡辺政太郎夫妻の名も、甲府の解放戦線で物故した慰霊碑に納まることになりそうです。

リベルテールは冊子の形になり雑誌らしくなりましたね。皆様の御努力がしみじみ思われます。ただ私は疑問に思うのですが、評論の文章をなぜあのようにまわりくどく、読みにくく書かねばならぬのでしょうか。若い学究者だけが理解し、同感すればよいというなら、むしろ何も言うことはありませんが、中学しか学ばなかった青年にも、気安く読めて理解される文章なら、もっと広い範囲の人々に好まれると思うのですが、それは私が老年のせいを感じでしょうか。何んのお役にも立ちませんのに文句を言うようで心苦しいのですが、私は小さな子供との話の中でも、人間のほんとうのしあわせな生き方を話し合っていくのが、私たちの仕事だと思っていますので、こんなことも書きたくなったのです。

信州の望月桂さんも八十六才で健在ですが、このあいだ夫人の一週忌で、私のところでも古川が行ってまいりました。いろいろと昔の運動のことや、同志の人々の思い出などを書いていられるようです。……

読者への特別サービス（五月末迄、以後は定価通り）

本会で萩原晋太郎著『永久革命への騎士・高尾平兵衛』を刊行！五月末迄に送金されれば送料共特価七五〇円で提供（四月末刊）口絵写真八頁、本文二二〇頁B六判活版限定千部（定価千共千円）内容は何れ紹介するが、大正の激動期に社会運動の真髄を貫いて、右翼の手に倒れた革命児の、波瀾万丈の一大ドキュメントである。幸徳や大杉の資料は多いが、当時労働者に大きな影響を与えた高尾の言行を発掘したのは本書が初めてである。貴重な運動資料だ。目次の大要を以下に記す。ふるって申込を願う。

第一部 揺籃の諫早 1 風雲児誕生 2 系図 3 諫早の風物詩 他
第二部 放浪の青春 1 大阪でもまれる 2 上京そして大陸へ出奔
第三部 激動の晩年 1 夜明け（大逆事件、近代思想、平民新聞）
2 北風会での出会い 3 大日本鉱山労働同盟会 4 法廷裸体事件
5 平公の手紙 6 大杉とも別れて（『労働運動』『労働者』、大杉栄との論争、彼の思想） 7 再び足尾争議に 8 ロシア飢饉救済運動 9 大庭柯公事件 10 極東民族大会 11 密行中に女の世話
12 第一次共産党 13 戦線同盟 14 スト破りから詫状をとる
第四部 反逆児の最後 1 運命の朝 2 虫の知らせか 3 その後の追跡 4 社会葬第一号 5 鎮魂譜 6 後日譚（遺骨諫早に帰る、殺人弁護士と長山のその後）
年譜、註解、あとがき、（序文は平岩巖氏による）

リベルテール 一部 100円

Le Libertaire 毎月一回15日発行

昭和47年4月15日発行 Vo. II No. 5

編集兼発行者 三 浦 精 一

発行所 東京都練馬区大泉学園町2190

萩原晋太郎方

リベルテールの会

（振替東京 133830 番 三浦精一）